

2016年(平成28年)10月18日(火)

2016年(平成28年)10月17日

「悲劇繰り返さない」

安野発電所 中国人の強制連行学ぶ

太平洋戦争末期、中国から日本に強制連行され、水力発電所建設に従事させられた人たちについて学ぶフィールドワークが16日、安芸太田町の中国電力安野発電所周辺で開かれた。当時、近くに住んでいた西区の栗栖薫さん(86)が元労働者について「ぼろぼろの服を着て、雪の中も裸足で歩かされていた」などと証言。参加者は、悲惨な歴史を繰り返さないことを誓った。

太田川水系にある安野発電所は戦時中、軍都広島島の電力を賄うため建設され、現在も稼働する。工事を担った西松組(現在の西松建設)は1944年夏、中国から360人を強制連行。収容所に入れ、長さ約8キロの導水トンネル掘りなど過酷な労働に従事させた。原爆の被爆死を含め、29人が死亡している。

この日のフィールドワークは「西松安野友好基金運営委員会」などが主催。父が中国人収容所の監視員だった栗栖さんが、建設現場に向かう中国人の様子について、「初めは掛け声をかけて歩いて

中国人労働者 住民らが追悼 安芸太田

戦時中、安芸太田町の安野発電所の建設工事で強制連行された中国人労働者を追悼し、日中友好を誓う集いが16日、発電所近くの石碑前であった。

9回目となる集いには、元労働者の家族や住民たち約80人が参列

した。中国・天津市の張振命さん(59)が、高齢で参列できなかった義父で元労働者の邵義誠さん(91)の代理で出席し「後世に歴史を伝え西国の友好をさらに広めていきたい」とあいさつ文を代読。参列者は石碑に献花した。

工事では、1944年に360人が強制連行され過酷な労働などで29人が亡くなった。

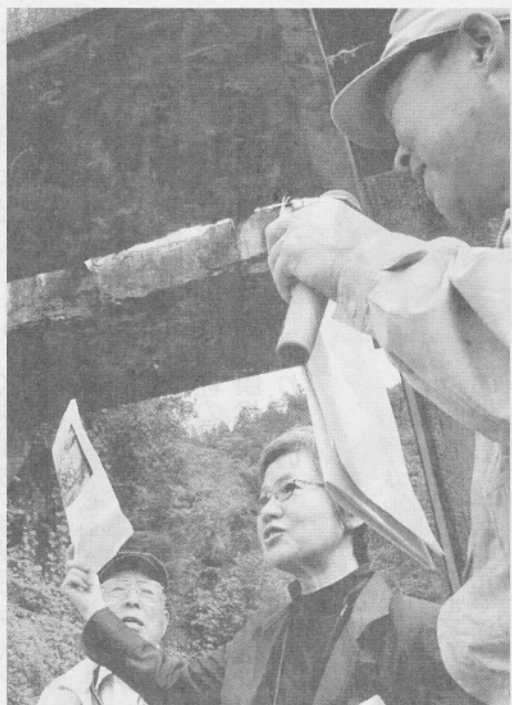
広島市の被爆体験伝承者の永原富明さん(69)は「原爆の被害と強制連行の加害という両方を見る大切さを実感した」と話していた。

たが、その年の秋には食糧不足で声も聞こえなくなるほどやせかけていた」と話した。

暗く水がたまっていたトンネル内でトロッコで石を運び出す仕事をさせられ、危険な重労働だったという。

フィールドワーク後、発電所近くにある碑に向かって被害者を追悼し、平和と友好を祈念する恒例の集いがあり、元労働者の家族も参列した。義父(91)が被害者で、中国・天津市から訪れた張振命さん(59)は「毎年来てはいるが、今年は特に若い人が多く、歴史を知ってくれるのがうれしかった」と話した。

【竹下理子】



中国人が強制連行された安野発電所で歴史を学んだフィールドワーク＝安芸太田町で